様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３１５０

研究課題名（和文）『土佐日記』英訳に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on the Translation of Tosa Nikki

研究代表者
大野　ロベルト（Ono, Robert）

法政大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：８０７２８９１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：フローラ・ハリスによる最古の『土佐日記』の英訳が、従前の理解よりも9年ほど早い1882年行われていたことを明らかにしたほか、1985年に刊行されたヘレン・マッカラによるものまで、五人の訳者による英訳『土佐日記』の内容を精査し、それぞれの訳文の特徴や問題点を整理した。また、ハリスについてはこれまで十分に研究されてこなかったその伝記についても調査を行ったほか、アール・マイナーについてはその多岐にわたる日本研究のなかでの『土佐日記』の位置付けを検討するなど，翻訳の精度という単純な視点ではなく、より広いジャパノロジーの文脈において『土佐日記』の英訳史を多角的に研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究により『土佐日記』の英訳をめぐる歴史が初めて明確になった。翻訳という作業の背景には外国人である翻訳者の日本での生活や日本人との関わり、あるいは翻訳者が『土佐日記』のほかに関心をもった対象など、様々な要素があるため、本研究は『土佐日記』や紀貫之、あるいは古典文学や英語、翻訳学の専門家はもとより、日本と欧米の交流史などに関心をもつ研究者にも有益な示唆を提供できるものと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study has documented, for the first time, that Flora Best Harris translated Tosa Nikki in 1882, which is almost a decade earlier than it has been understood in the past. As a whole, this project approached English translations of Tosa Nikki by five different Japanologists, of which one by Helen C. McCullough being the most recent. Other focal points include the biography of Harris, which has been obscure to date, and how Tosa Nikki was treated by Earl Miner, who studied various ranges of Japanese literature. Hopefully, this project will shed light on Tosa Nikki from a wider perspective of Japanology, rather than a simple evaluation of each translator's accuracy.

研究分野：日本文学

キーワード：紀貫之　土佐日記　翻訳　フローラ・ハリス　ジャパノロジー　アール・マイナー　ヘレン・C・マッカラ　W・G・アストン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

この数年、文学研究の国際化の必要性がいよいよ声高に叫ばれている。今後も文学研究が発展を続けるためには、国境を超えた多分野の研究者による協働が不可欠であり、そのような協働を長期的に活性化させるためには、これまでに日本の文学作品が海外においてどのように受容され、そこからどのような研究が生まれてきたのかということを、日本の研究者も深く理解し、積極的にフィードバックを行ってゆく必要がある。

ところが、日本文学の海外での受容に焦点をしぼった従前の研究では、海外の図書館や資料館に所蔵された日本の古典籍の調査が行われることなどはあったものの、海外の読者がどのように古典作品に触れてきたのかを知るうえで明らかに重要であるはずの古典の翻訳をめぐる研究については前例がきわめて少なく、文法の比較など、言語学的関心に基づくものを除けば、ごく少数が挙げられるに過ぎない。

本研究は、歴史を通じて重要な歌人に位置づけられてきた紀貫之の作品のなかでも高い知名度を誇る『土佐日記』を題材に、古典文学作品がどのように英訳されてきたのかという歴史を明らかにすることで、上述のような状況に変化をもたらそうとするものである。古典文学の英訳の歴史を検討するということが、特定の言葉が英語圏の人々にどのような形で伝わってきたのかを知るうえで重要であることは言うまでもないが、この作業を通して、日本人が新たな角度から古典に向き合う機会を創出することもできると考えた。

例えば、日本で初めて「もののあはれ」という概念が登場するテクストが『土佐日記』であることは、あまり知られていない。近世に入ってから本居宣長の理論によってその知名度を高めることになる「もののあはれ」は、しばしば「日本的」なる概念の代表的なものに挙げられるが、この言葉をわかりやすく説明することは容易ではない。そこで、試みに『土佐日記』の英訳から例を拾ってみる と、Harris（1891）は "sorrows"、Sargent（1955）は "sensibility"、Miner（1976）は "warmth" という具合に、訳者ごとにまったく違う言葉を選んでいることがわかる。このような差異は、いずれの訳がより「正確」かという問いを提起するのではなく、異なる時代を生き、異なる形で日本の言葉や文化に対峙した訳者が、どのようにそれぞれの形で古典の言葉を解釈するに至ったのか、という問いを提起するものである。そして、この問いはそのまま、それでは現代を生きる日本人は「もののあはれ」をどのように解釈しているのか、という問いにも結びつくのである。

以上のように、まだ蓄積の少ない古典文学の翻訳の歴史をめぐる研究を推し進めることに加え、日本文化を直截に表象する古典文学の言葉が外国人によってどのように解釈・受容されたのか、またその営みを日本人の読者にも照射することで何が見えてくるのかを明らかにしたいという関心が、本研究の当初の背景である。

２．研究の目的

(1)　本研究は歴史を通じて重要な歌人に位置づけられてきた紀貫之の『土佐日記』を題材に、古典文学作品がどのように英訳されてきたのかという歴史を、初めて網羅的に追求しようとするものである。具体的には、『土佐日記』がこれまでどのように翻訳されたのかを精査したうえで、『土佐日記』が海外でどのように読まれ、またその読まれ方が日本国内での読まれ方とどのように異なるのかということを明らかにする。

(2)　本研究は翻訳を主題としているため、その成果を日本語話者のみと共有しても不十分である。したがって成果を英語でもとりまとめ、積極的に海外に向けても発信することで、『土佐日記』の英訳をめぐる歴史を、訳者と同じ文化圏に属する人々を含め、広く海外の研究者と共有することを目的の一つとする。

(3)　『土佐日記』の英訳の精査および質の評価という作業が中心となる以上、本研究では必然的に『土佐日記』の原文を詳細に検討することになる。そこで副次的に、『土佐日記』の本文やその解釈の歴史についても何かしらの視座を獲得できることが期待される。

(4)　『土佐日記』の翻訳の研究に携わった人々は必然的にジャパノロジスト（日本研究者）でもあったため、その訳業について研究することは必然的に、19 世紀末から 20 世紀後半にかけてのジャパノロジーの展開を研究することにもなり、この点についても何かしらの視座を獲得できることが期待される。

３．研究の方法

(1)　Flora B. Harris 訳(1891)、William N. Porter 訳(1912)、G. W. Sargent 訳(1955)、Earl Miner 訳(1976)、Helen C. McCullough 訳(1985)の五点の英訳『土佐日記』を詳細に比較検討する。とくに、①訳者の意図および翻訳の方法などの成立背景、②訳書の形態・意匠、挿絵、再版の有無など、モノとしての訳書の演出・流通、③先行する翻訳と後続の翻訳の影響関係などの

相関性、④訳書に対する書評や、研究者による言及や引用などの波及性、という四つの視点を重視する。

(2)　翻訳とは取りも直さず解釈であるため、『土佐日記』の英訳本文を詳細に分析することを通して、それぞれの訳者が特定の言葉や概念、その背景にある文化をどのように理解していたのかを検討する。また、例えば Miner の英訳は *Japanese Poetic Diaries* すなわち『日本の詩的な日記』と題された書籍の一編として、『和泉式部日記』や『奥の細道』と共に訳出されていることから、少なくとも Miner にとっては『土佐日記』が「日記」の形態をとっていたことに大きな意味があったということになる。このように、各翻訳者の態度を精査することで、外国人研究者による日本文学の研究史を構築することもできる。

(3)　海外の訳者や研究者による『土佐日記』に対する様々な解釈を、日本国内における『土佐日記』研究によって蓄積されてきた解釈と比較検討し、両者がどのように異なり、その差異から何が言えるのかを検討する。これにより、外国人が日本に対して向けたまなざしが明らかになることはもちろんだが、比較対象なしでは言語化しにくい、日本人が自文化に向ける意識についてもその一端を明らかにすることができると思われる。

４．研究成果

本研究の最大の成果は、『土佐日記』の英訳の歴史のなかでも、その端緒に当たるフローラ・ハリスによる業績が、これまで考えられていたように 1891 年に出版された単行本 *Log of a Japanese Journey from the Province of Tosa to the Capital*, Meadville, PA: Flood & Vincent を初出とするのではなく、それより遡ること 9 年前の 1882 年の 1 月から 3 月にかけて、横浜で発行されていた英字新聞 *The Japan Weekly Mail* に連載されていたことを、初めて特定したことにある。

だが、そもそもフローラ・ハリスについては、一次資料およびハリスの没後すぐに刊行された山鹿旗之進『はりす夫人』（教文館、1911）のような二次資料を除いては、文献すら存在しない状況であったため、本研究では当初の予定よりも長い時間をかけて、ハリスの伝記的事実についてもこれを整理し、その成果を共有することに力を注いだ。その結果、ハリスが新渡戸稲造や徳富蘇峰のような当時の日本の知識人とも交流をもち、ハリスの業績が同時代の日本人の間でも認識されていたことが明らかになった。

また、ハリスによる英訳『土佐日記』を精査した結果、その訳文の質の問題とは別に、英語で発表されたものとしてはハリスの訳文に先行する数少ない資料である W・G・アストンの講演“An Ancient Japanese Classic: The ‘Tosa Nikki,’ or Tosa Diary”が、ハリスに相当の影響を与えている可能性も明らかになった。

以上、本研究の中心的な関心の対象となったハリスによる英訳『土佐日記』に関しては、「フロラ・ハリスによる英訳『土佐日記』について」（中古文学会春季大会、2019 年 5 月 19 日）、“Sailing Back and Forth: Translation of Tosa Nikki by Flora Best Harris”（IAFOR ACAS、2019 年 5 月 26 日）、“Sad, Warm, and Beautiful: The Origin and Dissemination of Mono no Aware”（The 3rd EAJS Conference in Japan、2019 年 9 月 14 日）、“The Three Trials of Flora Best Harris”（16th International Conference of the EAJS、2021 年 8 月 28 日）などの学会報告として日本語および英語にて発表したほか、「『土佐日記』英訳ことはじめ―フローラ・ベスト・ハリスの業績」（『日本研究』62 集、69-91 頁、2021）、「英語圏における『土佐日記』受容史の概略（戦前編）―アストンとハリスを中心に」（『異文化（論文編）』23 号、153-182 頁、2022）などの論文としても発表している。なお、ハリスの業績を含む『土佐日記』の英語圏での受容を、ジェンダー研究の視点も取り込んで検討した論文は、国際共著 *Confronting Conformity: Gender Fluidity in Japanese Arts & Culture*(Dean Conrad and Sayuri Hirano eds.,McFarland, 2023)の第一章“(En)gendering Literature: Tosa Nikki, or Where Writing Begins”として発表予定である。

ハリスの没後から 1985 年までに刊行された残る四つの英訳『土佐日記』については、ハリスの研究に予定以上の期間を費やしたことから、当初の計画ほどには時間を割くことができなかった。しかしながら、出典そのものが曖昧であったハリス訳と比べれば、いずれも少なくとも本文が確定した英訳であることから、訳文の分析には十分に注意を向けることができた。その結果、訳者ごとの訳文の特徴や、原文に対する誤解や誤読の可能性、あるいはとくに工夫の見られた表現などを整理し、論文「英語圏における『土佐日記』受容史の概略（戦後編）―国文学と日本研究」（『異文化』24 号、71-88 頁、2023）としてまとめることができた。

本研究の副次的な成果としては、『土佐日記』および紀貫之について、必ずしも翻訳の問題によらない、古典テクストにおける言葉の働きそのものについての研究も並行して進めた結果、和歌を中心とする当時の文芸の意味生成過程を独特なものにしている「歌枕」や、和歌における意味や音声に結びついた身体性の発露などに関して、新たな視座を獲得することができた。これらについては論文「〈なごり〉考―「土地の名」を中心に」（『人文科学研究（キリスト教と文化）』52 号、135-162 頁、2020）や、編著『Butoh 入門』（文学通信、2021）の第一章「綱渡りする死体―日本語の身体性」にまとめている。

なお、上記の論文等では、ハリスやアストンをはじめとするジャパノロジストたちの業績が、

同時代の国文学者たちの間でも高く評価されていた点にも言及しているが、このことは今後の研究に向けての重要な示唆となった。我々は、外国人による日本に関する研究が、どちらかといえば海外にいる人々に向けて発信されており、日本国内ではその研究の内容が広く共有されたり、ましてや日本人研究者の参考に供されたりすることは少ない、という印象を受けがちである。しかし実際には、少なくとも明治大正期に関して言えば、日本人の研究者は外国人による日本研究の成果を評価し、積極的に自身の研究と接続していたことがわかってきた。そうだとすれば、現代日本のいわゆる国文学の成立には、外国人研究者の存在が不可欠だった可能性もある。今後、この点をさらに詳しく追求することは、ジャパノロジー研究を深化させるうえでも、日本文学の研究史を構築するうえでも、きわめて重要であると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 大野 ロベルト	４．巻 23
２．論文標題 英語圏における『土佐日記』受容史の概略（戦前編）：アストンとハリスを中心に	５．発行年 2022年
３．雑誌名 異文化．論文編	６．最初と最後の頁 153-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15002/00025974	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大野 ロベルト	４．巻 24
２．論文標題 英語圏における『土佐日記』受容史の概略（戦後編）:国文学と日本研究	５．発行年 2023年
３．雑誌名 異文化	６．最初と最後の頁 71-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大野ロベルト	４．巻 62
２．論文標題 『土佐日記』英訳ことはじめ　フローラ・ベスト・ハリスの業績	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本研究	６．最初と最後の頁 69-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15055/00007636	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大野ロベルト	４．巻 52
２．論文標題 〈なごり〉考　「土地の名」を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人文科学研究（キリスト教と文化）	６．最初と最後の頁 135-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34577/00004865	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Robert Ono
2．発表標題 The Three Trials of Flora Best Harris
3．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 大野ロベルト
2．発表標題 フロラ・ハリスによる英訳『土佐日記』について
3．学会等名 中古文学会春季大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 Robert Ono
2．発表標題 Sailing Back and Forth: Translation of Tosa Nikki by Flora Best Harris
3．学会等名 IAFOR ACAS（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Robert Ono
2．発表標題 Sad, Warm, and Beautiful: The Origin and Dissemination of Mono no Aware
3．学会等名 The 3rd EAJS Conference in Japan（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 大野ロベルト
２．発表標題 「もののあはれ」をめぐって―過去へ、世界へ、言葉へ
３．学会等名 国際基督教大学「近世日本史特別研究」ゲスト・スピーカー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大野ロベルト
２．発表標題 紀貫之の〈なごり〉としての日本文学
３．学会等名 第183回アジアン・フォーラム（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 大野 ロベルト、相原 朋枝	４．発行年 2021年
２．出版社 文学通信	５．総ページ数 352
３．書名 Butoh入門	

１．著者名 大野ロベルト	４．発行年 2019年
２．出版社 東京堂出版	５．総ページ数 608
３．書名 紀貫之	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関